

波乱の歴史を秘める武具の数々

— 恵美押勝の乱に数多く流出 —

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

金銀鈿荘唐大刀は稀有な生残り

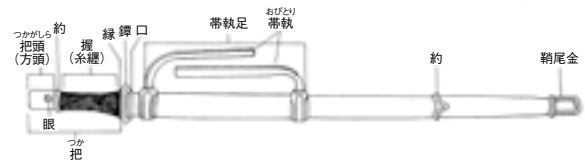
前回紹介の金銀鈿荘唐大刀は漆塗鞘御杖刀及び具竹鞘御杖刀と並んでともに、国家珍宝帳に記載されている品である。貢納された多くの刀剣の内、残存しているのはこの三口とされている。いわば歴史の激動の中を潜り抜けてきたものであるが、武具類の多くは、こうして残ってきた品々といってよさそうである。

全て反りのない直刀型

伝存する刀剣の全体的な特徴を『資料』で見よう。「正倉院の刀剣全体の造込について述べれば、大刀は北倉三口、中倉四十九口、南倉三口、計五十五口あるが、これらの大きな特色は、後世の日本刀のように反りのあるものではなく、すべて反りのない直刀であるということである。また五十五口中、平造が十九口、切刃造が二十六口、鑄造が四口、鋒両刃造が六口である。……

刀身で、いま一つ注目すべきことは、茎の孔のことである。孔が茎尻に大きく一つあるのと、小さい穴が二つあるのとは大別され、一つは懸通しの孔で、それで把(柄)と刀身が固着される。小さい孔二つのは、目釘孔用で、これで把と刀身を固着させるが、この場合、把はいずれも鮫皮巻で、唐大刀と称するのが、この例である。」

注) 茎—刀身の、把に入っている部分



大刀

多いのは質実剛健風の黒作大刀

「なお、外装、つまり拵については、多いのは黒作大刀である。金具は鉄製、黒漆塗、帯執は洗革、帯は麻布、懸は洗革、把の握は麻糸を巻きつめて漆塗で、飾り気のない質実剛健なもので、いわゆる兵仗用である。珍宝帳にも百口中、四十口が黒作大刀で多数を占める。……銅漆作大刀も、金具が銅製、漆塗の大刀で、名称は珍宝帳によっており、およそ黒作と同じである。黄金荘大刀は文字通り金具が金で製作されたものである。金銀鈿荘唐大刀二口は、金具が銀台鍍金、把は鮫皮巻でいわゆる唐大刀形式である。」

金銀鈿荘唐大刀 第3号

資料：全長86.1cm 把長16.3cm 鞘長69.1cm

[調査の結果]

懸緒：これは古い。しかし根元の方は明治修理のためか、新しく見え、白い。前品に近い古い革緒は、芯が麻の繊維のようであり、縫い糸は二本撚りである。しかし、前品よりも毛穴は細く、古い部分の表面はかなり磨り減っており、毛羽立ちも見られる。

風合いは硬めである。毛穴の分布から小牛革と見る意見と、小牛革では縫目が保てない、切れてしまうとの見解が出たが、前者が有力である。部分的に毛根が残っている。

把：材質は鱧皮^{えい}で「鮫皮卷」の技法が優れている。ほとんど継ぎ目を感じさせず、見事である。柄革の玉粒の頂上が磨耗している。その欠けた部分に黒いシミのような汚れがついている。これは大刀を使うことによって磨耗したのか、光沢を少なくするために削ったのか、分からない。中列の大玉粒も頂上が削れている。前項と同様の理由から材質を判断した。

鞘：木製で、半透明の皮状のもので巻かれている。それは腸管と伝えられているが、確認できない。その上に漆が塗られており、2箇所以上の亀裂が見られる。

黒作大刀〈くろづくりのたち〉第13号

資料：全長87.8cm 把長16.5cm 鞘長70.3cm 身長68.2cm 茎^{なかご}長16.1cm 把は椋^{むく} 麻糸巻 黒漆塗 鞘は木製薄皮包 黒漆塗 金具は鉄製黒漆塗 刀身は切刃造

[調査の結果]

鞘：「薄皮包」と考えられるものの、形状は見にくい、半透明のように見える。鞘の先は修復されている。それに続く古い塗りに3箇所の亀裂が横切る形で入っている。赤味の漆である。

薄皮包：通常の観察では判断が極めて難しい。拡大すると、薄皮と見られる部分は「にかわ」、あるいは「生皮^{きがわ}」のような外観を示している。しかし、毛根の残存も見られ、「生皮」の利用を示している。しかし、材質は馬皮の可能性も考えられるが、種類の判定は困難である。今までと同様に漆割れがみられる。

帯執：鞘に近い部分が鹿革で、薄茶色をなし、色むらや退色が見られない。丁寧な染

色法をしているようで、染色の前後に計2回の燻^{いぶ}しをした可能性がある。

大刀〈たち〉残欠

資料：長22cm

[調査の結果]

把：左撚りの麻紐を柄に巻き、漆を塗ったものである。大刀のさらなる破損を防ぐためか、あるいは麻紐が擦り切れたために鹿皮が巻きつけてある。後世の巻きつけと考えられる。古い部分の皮紐の線維は毛羽立ちも見られるが、皮は硬い。把を縛るために緩みのない皮を使っていると見られる。牛の生皮ではないかと推定されたが、拡大写真に見られるように、線維の細さと解れ具合から鹿皮の可能性はある。

鞘：断面に規則的な線維の列が見える。漆片では布目があり、1cm位の幅に50~60の目があるので、絹布の痕だろう。皮らしきものは見られなかった。

伝世品としては最古^{よろい}の甲

まず、『資料』から全体的な様子を見よう。国家珍宝帳に、「御甲壹百領 短甲十具 挂甲九十領とみえ、挂甲^{かけよろい}のうちの一領に「除物」の貼紙があり、天平宝字八年(764)九月、恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱に際し、御甲九十九領が蔵から持ち出されたことが、延暦六年(787)の曝涼使解(北倉162)に記録されている。したがって、現存の御甲残欠が、珍宝帳記載の品か否か定かでない。形式からは奈良朝のものと考えられる。

小札^{こざね}は一端を圭形とし、他端にむけて次第に細くなる造りで、つなぎの小孔^{けい}をあけ、貫緒^{ぬきお}や革でつなぐ。小札はA~Dの四種類に分けられるが、B、Cは同型であるが、小孔の数が異なる。Dの工字形のは、本来挂甲のものではないらしく、混入品と見ら

れる。因みに延喜兵庫寮式には〈挂甲一領〉が、〈札八百枚〉とある。」



おんよろいざんけつ
御甲残闕 C型・長7前後 小札は鉄鍛造 革の横縫 白貫緒・紫貫緒 残存枚数 C型1602枚

御甲残闕〈おんよろいざんけつ〉、綴じ緒
資料：A型・長14cm前後 B、C型・長7cm前後 D型・長6cm前後 小札は鉄鍛造革の横縫 白貫緒・紫貫緒 残存枚数A型13枚 B型250枚 C型1602枚 D型6枚
[調査の結果]

伝世品としては最古の甲である。綴じ緒は鹿革と見られる。革は柔らかさそうである。綴じ紐の表面はかなり磨耗している上に、実用に供されたためか革の老化も進んでいるが、その割には柔軟性も残存している。革線維の解れ具合もかなりあり、燻し革の可能性もあろう。

射るときの防具：鞆^{とも}

弓矢に関わる道具として鞆がある。ほとんど皮革ばかりで作られているといえる品物の一つが、鞆である。『資料』及び18年の『展示目録』によると「弓を射るときに、弓を持つほうの手首内側につけ、弦で腕をはじくのを防いだり、弦が訓等に当たって切れるのを防ぐために用いた。鹿革製ともいわれるが不明。二枚の革を縫い合わせて作り、内部に詰めものをするが、第4号、第10号はマコモを用いている。舌状の手と

呼ばれる部分は牛革、他の一端に取り付けた緒は鹿革である。手に穿った小孔に緒を通して手首に結びつける。中世以降は次第にその使用が廃れていったようである。」

余談ながら、鞆といえば思い出すのは「鞆の浦」である。鞆の浦は古くから内海交通の要所であり、源平合戦の古戦場の一つであるが、「万葉集に歌われた景勝地で、江戸期の町並みや港湾の遺構が残り、〈世界遺産級〉と評価される広島県福山市の鞆の浦」(朝日新聞：平17. 12. 28)。この地形が実は鞆の形そのままなのである。現在でも自然を生かした円形港湾を形成している。昔の人は、山上から見た湾の形が鞆そっくりなことから地名としてつけたと思われることから、鞆という道具も相当古くに考案された防具であったと考えられる。

注) 訓一装身具の腕輪

鞆 第1号 漆革本体・綴じ緒

資料：幅11.2cm 厚5.9cm 革製 黒漆塗
[調査の結果]

鞆は、手、本体、緒で構成されている。手：革の様子と厚みから牛革と思われる。厚さは1.1~1.2mm、ほとんど皺がないが、形跡は残る。これには切り込みを入れて輪ができるようにしており、これに緒を入れて鞆を手固定するようになっている。切り込みの程度や輪の大きさは鞆によって様々であり、用いた人に合わせて作られたといえる。

本体：毛皮を裏向けて、つまり肉面側を外にして形成したものといわれているそうだが、さらに毛類も詰め込んでいるようにも見える。漆は焦げ茶色で、縫い目は野球の硬球と同じように突合せ縫いで、かなり亀裂が入っており、皮質は堅固である。漆の僅かな剥落部の調査では単毛が観察され、銀面側を外にした牛馬革の可能性もある。

内部には白い毛が見える。緒を取り付けている部分の断面構造は緒と同じように見えるが、革が厚く、判定は困難である。

緒：この部分は新しく、昭和40年代修理のもので鹿革である。取り付け部の本体の穴から毛状のものが見える。

鞆 第2号

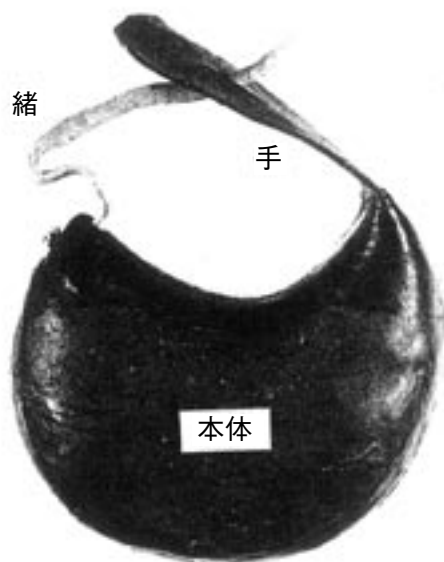
資料：幅12.3cm 厚6.5cm 革製 黒漆塗
[調査の結果]

手：皺のある牛革である。厚さは2.3～3.3mm。

本体：修理時に使われた詰めものの毛は、鹿毛という。外側と斜めの切り口は白っぽい。皺は比較的大きい。毛は単毛であり、皮革の線維の繊細さから見ると牛皮ではないように見え、例えば馬革のような他の皮の可能性があろう。判定は困難である。

毛：別包みにある毛は白っぽい。鞆の身からは見えない。

緒：鹿革としては硬めである。よく使われていたようである。



鞆第5号

鞆 第5号

資料：幅11.8cm 厚4.3cm 革製 黒漆塗

片面は赤色地に生漆塗

手：やや薄くて1mm、皺^{しぼ}は浅く、牛革である。

本体：片面に生皮^{きがわ}を用いているようである。漆の僅かな剥落部分の観察で単毛を一本検出した。1号と2号の事例をも考え合わせると、牛馬皮を、表にして作成した可能性もありうるだろう。材質の判定は困難である。

鞆 第8号

資料：幅12.2cm 厚12.2cm 革製 黒漆塗

緒の取り付け部分の、本体の革の切り口における革線維はかなり細かいようである。線維束もあまり感じない。擦れているためか、線維束の外に細かい毛状の線維が見える。本体の材質は牛皮ではないと思われる。熊の毛皮の可能性が高い。緒の材質は鹿革である。

鞆 第9号

資料：幅12.4cm 厚5.7cm 革製 黒漆塗

鹿革の緒は新しく、巻き込んである。手に漆の剥落部分があり、革は茶色っぽい。

本体は線維が細かく、比較的^{比較的}水平方向に走っている線維が多い。また、漆が流れ込んだ毛穴の痕跡が皮の裏面に散在していることから牛皮とは考えられず、熊の毛皮と見られる。塗膜の直ぐ下から皮の線維構造が見える。

鞆 第11号

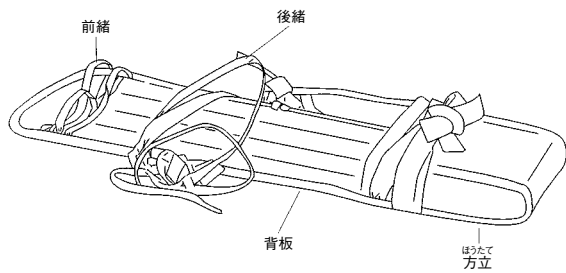
資料：幅13.6cm 厚6.1cm 革製 黒漆塗

判定に資するような材料は得られなかった。

鞆 第12号

資料：幅11.1cm 厚5.9cm 革製 黒漆塗

鹿革の緒は新しく、昭和修理の分であり、巻き込まれている。



胡禄

胡禄は矢を入れる背負具

資料によると「胡禄は矢を入れて背に負う道具で、正倉院には三十三口伝わっている。蔓を編んで造ったもので、第4、28号はアケビ類、第23、31号は籐属の一種の蔓であることが判明している。平編、篋編のほか、綾杉文、菱文、斜格子文などの文様をあらわしている。表面は蘇芳染のうえに漆を塗った赤漆塗、黒漆塗、また白葛胡禄のように生地のままのものがある。第28号は斑犀角製の底板を用いているのが注目される。前緒、後緒、帯、帯執は鹿洗革を用いるが、帯には麻布製もある。中倉5白葛胡禄は4口とも丈低く、底部に向かって扇状に広がった平胡禄である。国家珍宝帳の胡禄は天平宝字八年の恵美押勝の乱に際して出蔵され、還納されなかった。現存の胡禄には鏝の納まる方立の側面に「東大寺」の朱書があるものがあり、これらは東大寺本来のものであったかと考えられる。第11号は、付された木牌に天平宝字八年九月十四日の日付があり、まさに押勝の乱の最中に出用され、その後戻されたのであろう。」

うるしかずらのころく 漆葛胡禄 第11号

資料：長50.5cm 幅12cm 蔓 黒漆塗
矢48隻 矢長73.7～81cm

[調査の結果]

「明治三十六年七月補修胡禄并帯」及び「明治36年10月」・「洗皮帯」と記した木札が付いている。継ぎ足された白い部分は明治補修の革である。柔軟さがあり、緒の内側には曲げによる大きな波が出来ている。

3箇所の緒：胡禄には上中下の3箇所に鹿革の緒が取り付けられている。上（前緒）と下の緒は胡禄を体につけるもの、中紐（後緒）は矢を保定するためのものである。これらの緒はその柔軟さから見ても燻し革と推定される。

後緒：胡禄の裏側で明治修理時の革がつかないである。いずれも鹿革で薄く、両面燻し革と推察する。

木札：年月日の他に「洗皮帯」とある。修復革には毛が見られない。古い革は燻し革のようだが、元は洗革であるかもしれない。しかし、外観の色は一様であり、鹿の燻し革のようにも見える。使用時における革の耐水性や現状の柔軟性を考えると、燻し革とみるのが妥当であろう。

前緒：象牙または鹿角製の^{こはぜ}鞋があり、革の先端を切って二本にして鞋の二つの穴に通し、裏側で結んでいる。

白葛胡禄 第28号

資料：長57.8cm 幅17cm 蔓座・底板は斑犀角 矢47隻 矢長79.4～84.2cm

[調査の結果]

緒：新紫革は昭和40年修理の分である。本来の緒はかなり硬めで、染料は薄い部分では貫通し、厚い部分では表面（両面）染めになっている。よく使われたためか、かなりの褪色も見られる。状態から見て鹿の刷毛染め革である。厚さは0.5～1mmほど。軸は象牙、底板及び紐の付け根には犀の角が使われており、優品である。